



永野のり子、ステップス三度目の個展である。永野はステップスだけではなく、なつか、ギャラリーパリ等でも個展を開催し、数多くのグループ展にも参加して、自らの研鑽を積んでいる。

永野は近年、水面に映る風景を抽象化した作品を制作しているが、毎回主題を転じているので、変化を続けている。しかし今回の変化に、私は特別なものを感じる。永野から話を聞いたのだが、忘れてしまった。

新生児は、常に上を見ている。母胎内では羊水に浸っているので、上下左右奥手前の感覚は存在しないであろう。

地上という娑婆に生れ落ち、死に至る迄、地獄の日々である。それが「生きる」という宿命であろう。新生児は社会のルールどころか、地上の法則を理解するのに長い時間がかかる。何故、自分は上だけを見詰めているのかと。

永野の作品は、水中から上を見上げるモチーフでは決していない。水中があろうとも、あくまで水面である。人間が水面を覗き込むことが出来るまでには、首が据わり、四足で動ける一歳頃からか。

すると永野の作品は、一歳以前の体験が盛り込まれているような気が、私にはしてならないのである。

